

ボエティウス『哲学の慰め』における自己認識の問題

——第一卷第六章に着目して——

石井雅之

ボエティウスの『哲学の慰め』(De Consolatione Philosophiae)は、それがあたかも寄せ木細工でもあるかのようになされること¹⁾が少なくなかった。その一因は、おそらく、ボエティウスの哲学者としての特質にあるのであろう。すなわち、彼は多くの様々な人々や著作から多くを学んだ者であるということである。他方また、かつての Quellenforschung の流行にも一因が求められるかもしれない。だがともあれ、『哲学の慰め』を熟読してみるならば、そこには寄せ木細工とばかり言っている片付かぬものがあることが明らかとなる。すでにランドが指摘したように²⁾、『哲学の慰め』については、諸思想綜合の仕方にこそ独自性が認められるべきであり、ひいては所説の一貫性が考え直されるべきであろう。

『哲学の慰め』は、その全体が一貫して病の治療過程として

展開されている。その治療過程とは、自己認識への教導の過程にほかならない。本論考は、このことを第一卷第六章にもとづいて明らかにしつつ、かつその教導がいかなる観点から進められようとしているかを随時指摘してゆこうとするものである。

周知のように、『哲学の慰め』は対話によって展開してゆく。対話者はふたりで、その一方は、第一卷第三章第一節から「フィロソフィア」(Philosophia)と呼ばれる者であることが知られる。もう一方は、フィロソフィアによって「人間」(homo)などと呼ばれる(De I. 2. 2)者である³⁾。この人間は、フィロソフィアによって「病人」(aeger)として扱われる(De I. 1. 2)。第一卷第二章第三節によれば、病名は「lethargus」である。それは一種の精神(mens)の病(morbis)であり、この病に罹った者は一時自己を忘却してしまふ(sui paupis oblitus est)のだという。こ

の病人のもとに来訪したフィロソフィアは、第一巻第六章でいよいよ彼の治療にとりかかろうとする。フィロソフィアはそこで、治療法をみてとるために、病人の精神の状態を打診する。

いわゆる問診をすると言ってよいだろう。そしてその問診にもとづいて『哲学の慰め』の以下の議論は展開されていると考えられる。しかし、この問診にもとづくフィロソフィアの治療が実際どのように施されていっているのかということになると必ずしも明らかとは言えない。

第一巻第六章は、大きく前半と後半に分けることができると思われる。前半とは、フィロソフィアと病人との間で問答が交される部分(106)で、後半とは、その問答にもとづいてフィロソフィアが診断を下す部分(6 sbs.)である。クルセルは、第一巻第六章を理解するにあたって、前半の問答よりも後半の診断のほうに着目した。そして第十節にもとづいて『哲学の慰め』の以下の部分を三段階構成としてとらえようとした⁴⁾。第一段階は、自己の認識であり、第二巻がこれに対応する。第二段階は、万物の目的の認識であり、第三巻および第四巻の第五章までが対応する。そして第三段階は、世界を支配している法則の認識であり、第四巻の終結部および第五巻が対応するというわけである。しかし一方、トレンクレおよびバルテスは、前半にみられる問答のほうを重視した⁵⁾。バルテスによれば、そこに提出されたフィロソフィアの問いは四つである。第一は、世界は偶然によって支配されているのかそれとも理性(Vernunft: ratio)によつて支配されているのか、という問い。第二は、い

かなる舵によつて世界は支配されているのか、という問い。第三は、万物の目的は何か、という問い。第四は、人間とは何であるか、という問いである。そして、トレンクレもバルテスも、第一巻第六章においては、世界支配は偶然によつているか理性によつているかという第一の問いにのみ病人は正しい答えを答え、それゆえそれを除いた三つが以後の課題として設定されたとみた。つまり、世界はいかなる舵によつて支配されているのか、万物の目的は何か、人間とは何であるか、の三つである。

クルセルの見地に立つても、トレンクレおよびバルテスの見地に立つても、設定された問題は三つとなる。そのうち、自己ないし人間に関するものを除いた二つの問題については、どこでその解答が得られているかということになると必ずしも明らかとは言えないものの、それらの問題は実際論じられていっているということは誰の目にも明らかである。ところが、残された自己ないし人間に関する問題については、どこで解答が得られているかということはもとより、どこでどう論じられているのかさえ明らかでないように思われるのである。それは、ひとつには、『哲学の慰め』という作品が未完成であるか否かという論点に結びついてくる⁶⁾。だが、もうひとつ重要な理由があると思われるのである。それは、この自己ないし人間に関する問題が第一巻第六章でどう設定されているかが未だ十分に理解されていないということである。後半に着目したクルセルが「自己の認識」の問題としたのに対し、前半に着目したトレンクレおよびバルテスは「人間とは何であるか」としたというよ

うに、問題そのものも不明確にとらえられているわけである。

だからこそ、われわれは、第一巻第六章の議論を吟味し直さなければならぬ。とくに仔細な吟味を必要とすると思われるのは、前半でなされるフィロソフィアと病人の問答の内容である。バルテスが四つの問いを抽出した第二節から第八節の問答を吟味してみると、そこにはより細かく、六つに分けられるべき問いが含まれていることがわかる。第一は、この世界は、無分別で思いがけない偶然によって動かされていると思うか、それとも理性による何らかの支配がそこにはあると信ずるか、というもの(②)。第二は、この世界はいかなる舵によって支配されているのかをみてとれるか、というもの(③)。第三は、何が万物の目的ないし究極(terminus)であるか、また全自然の衝動ないし志向(totius naturae intentio)がどこへ向かっているかを憶えているか、というもの(④)。第四は、万物がどこから発した(processum)かを知っているか、というもの(⑤)。第五は、おまえはおまえが人間であることを憶えているか、というもの(⑥)。第六は、人間とは何であるか、というもの(⑦)である。

これら六つの問いは、観点上、三つに分類することができると思われる。つまり、世界支配に関するもの、万物の始源・目的ないし究極に関するもの、そして最後は仮に人間に関するものとしておこう。この三つを、便宜上、 α 、 β 、 γ と呼ぶことにする。 α は第一・第二、 β は第三・第四、 γ は第五・第六ということになるわけである。

概略的にみた場合、 α については第二の問いに病人は答える

ことができなかつたと考えられる。 β については第三の問いに答えることができなかつたと考えられる。 γ については第六の問いに答えることができなかつたと考えられるだろう。それに、後半部の第十節を見ても、そこにはまず γ にもとづく診断(①)、次に β にもとづく診断(②)、最後に α にもとづく診断(③)が述べられており、病人が前半部で答えることができなかつたと考えられる点についてフィロソフィアの診断がまともられていると考えられるだろう。ただし、 α の第二、 β の第三に対しては第十節に逐語的対応が見られるにもかかわらず、 γ の第六に対しては「人間」(homo)という語の対応が見られないのである。だが、第二節から第十節を通観してみるならば、そこは、 α ・ β ・ γ ・ γ ・ β ・ α という順に書かれていることがわかり、これもし意図的に整えられた構成であるならば、 γ についてだけは対応が厳密でないのだとは考えにくい。しかも、 γ のような観点からする問いのかたちにおいてはじめてフィロソフィアは病人の病の「最大の原因」をみいだしたと言っているのである。

そこでわれわれは、この γ の内容を明らかにするために、前半の α ・ β の問答からまず吟味してみなければならぬ。前半の問答は、ただフィロソフィアの問いに病人が答えられているか否かにとどまらない含意をもっているように思われるからである。

α の問答について注意しなければならないのは、そこには、神の世界支配にいったい人間は包括されているのか否か、ある

いは人間は、どう包括されているのかという問題があるということである。世界(anundus)について問われたαの第一の問いに對して、病人は「かくも、確実なものども」(tam certa)と受けて、「かくも確実なものどもが偶然によつて動かされているとはみなせません、創造者(creator)たる神がその作品(opus)を支配していることを知っています」と答えているが、この「かくも確実なものども」には明らかに人間は含まれていない。それは、すぐあとの第三節でフィロソフィアが「なるほどおまえはそのことを少し前にも歌つたのでした、そして人間のみが神の配慮から外れているということを嘆いたのでした。実際、それ以外のものについては、理性によつて支配されているという確信をおまえは揺るがされることはなかつたのです」と述べているとおりである。「少し前にも歌つた」というのは、第一巻第五詩を指していると考えられ、まさにそこでは、病人が、神の作品のうちで人間のみが神の支配から外れているといつて嘆き、神に、地上を顧みてくださいと訴えかけていたのである(「E. 42-48」)。

さて、αの第二の問いとそれに対する病人の反応は、この、人間のみが神の支配から外れているという考えに對するフィロソフィアの治療のあり方と、他方の病人のあくまで説明と理解を求めるといふ要求との対立を示すものと考えられるであろう。フィロソフィアは、第二巻第八詩で、天界を支配する愛が人間の心(animus)をも支配するなら人間は幸せだと歌い聞かせる。そして、第三巻第十二章に至ると、フィロソフィアは、

第一巻第六章のこの問答を想い起こさせ、「いかなる舵か」とそのとき問うたその解答は「善の舵」ということにほかならぬと説き、病人にそれをもつて納得させようとしている。それだけで病人が満足しないことはフィロソフィアも承知している。事実、病人は、第四巻第一章の第二節から第三節で、「今まであなたが話して下さつたことがらは・・・神的で・・・犯しがたいことが明らかになりました」と言いつつも、やはり「しかし、私の悲しみの当の最大原因は、万物の善なる支配者が存在するにもかかわらず、あるいは一体に悪が存在しえ、あるいはそれが罰せられないままでいくこと、そのことなのです」と訴えないではいられないのである。しかしフィロソフィアは、そこには、第四巻第六章第二節のことばをもつて言えば「活力の極みにも至る精神の火」(utacissimus mens ignis)による抑制ないし制限が必要なのだと考えているのである。あくまで説明と理解を求めようとする病人の要求に對して、第四巻第六章第一節でフィロソフィアは他方また、そうした理解というものも「おまえの治療薬の一部」だと言う。ところがまた同巻同章第三十九節になると、フィロソフィアは「神の業(opera)の巧みのすべてを固有の認識能力(ingenium)によつて理解し(comprehendere)たり(ことばで説明し)(explicare)たりすることは人間には許されぬ」と言い、第二節と同様理解を抑制ないし制限することを説くのである。フィロソフィアのこのいわば二面は、第四巻第五章第五節にもすでに現れていたと考えられるだろう。結局のところフィロソフィアは、説明し理解する

という病人と共通の場に立つて、ものの方の転回を促すようなヒントを与える議論をしつつ、最後まで理解の抑制ないし制限のほうを強調しているように思われる。

さて次にβについては、まず、第三の問いがこのかたちで提出されるにあたっては、αと同様、第一巻第五詩の内容が前提になっていると考えられる。病人は、同詩第二十五行から第二十七行で、「万物を確固たる目的 (目) のもとで操舵しながらあなたは支配者にして人間の行いのみは適切な仕方では包括することを拒まれる」といって嘆いていた。ここにも、人間のみが除外されているとの思いが「目的」の語とともに現れていたわけである。こうした病人の思いに対して、フィロソフィアは、αにおいては「いかなる舵か」という問いを発することによって打診したのであった。βにおいては「何が目的なのか」ということを問うのである。

ただβの場合には、αになかった要素を導入しているのである。それが現れているのは、フィロソフィアの「憶えていますか」(meminsitne?) という問い方と、それに対する病人の答え方、すなわち「聞いたことがあります、ですが悲しみ (maeror) が記憶を鈍らせてしまいました」という答え方である。ここに示唆されているのは、この背後に魂の降下・帰昇という図式が念頭に置かれているということ、そしてその図式はとりわけいわゆる想起説とのかかわりにおいて考えられているということだと思われる。フィロソフィアは、第三巻第十一章の第二十四節から第二十五節において、このβの第三の問答を想起こ

せ、万物の目的は善であるということをもって病人を納得させようとしている。そしてそのすぐあとに置かれた第十一詩から第十二章第一節にかけて想起説ふうの内容が説かれ、万物の目的を忘れたことが忘却の過程に結びつけられる。つまり、忘却には二段階が考えられており、第一段階は魂が降下し肉体と接触したことによるものであり、第二段階は悲しみ (maeror) によるものである。まさにこの第二の忘却が、一度聞き知った万物の目的の何たるかを忘れさせたのだということになるだろう。この悲しみによる忘却というのが「哲学の慰め」においていかにとらえられているのかということについては、第一巻第六章第五節にみられる「防護壁の堅固な樫材が口を開けたかのように」(tut hanc nali robore) という表現が理解の手がかりを与えてくれるように思われる。また、今は一口に想起説と言ったが、それはいったいどのようなものとして考えられた想起説なのかという問題がここにかかわってくる。おそらく、この想起説はいわゆる照明説との対比を何らかのかたちで経ているものだと考えられるであろう。他方、魂の降下・帰昇の図式そのものについては、それが『哲学の慰め』にはあるということは、第三巻第六詩、同巻第九詩、第五巻第二章、同巻第三詩などから明らかである。しかし、魂の降下・帰昇の仕方そのものが細かな論点にわたって述べられているわけではなく、わずかな特徴がつかめるように思われるのみである。概略を言えば、神から発し、軽い乗り物 (leuis curtus) に乗せられ、地上で肉体に繋がれ、肉体から解放され、乗り物 (vehiculus) に

乗って、神のもとへ帰るといふことになる。肉体、および一般に『*β*』と呼ばれているものの起源については明確に論じられていない箇所がないだけにどう考えられているのか見定めがたいところがある。

ともかくも、この魂の降下・昇昇の図式が念頭にあってこそ『*β*』の第四の問いが問われたのだといふことはいえるだろう。始源も、そして目的ないし究極も、神として一なるものにほかならないという認識があればこそ、フィロソフィアは第四の問いを提出し、かつ「始源はわかっているながら、万物の目的の何であるかは知らないといふことがどうしてありえましょうか」と述べたと解せるわけである。そして、『*β*』の第四の問いに対して病人が始源として神を確信をもつて断言したことは、フィロソフィアが病人に目的としての神を一種の想起説にもとづいて認識させるための基盤となつていふと考えられるだろう。

さて、『*γ*』においても、第五の問いにおいて、やはり「憶えていますか(『*mēnisthō?*』)と問われている。おそらくここでも、忘却したところを想起させるといふことが考えあわされているとみることができよう。また、第五の問答を受けて問われた第六の問いに対して、病人が定義としての答えをもちだしたことは、『*α*』の問答にみられた、あくまで説明と理解を求めようとする病人の姿勢を伺わせていると考えてよいかもしれないのである。

『エイサゴーゲー註解第一』および『カテゴリー論註解(第一)』では、「定義について「可逆的であるか否か」という観点が導

入されてきている。¹³「可逆的である」(『*converti(posse)*』)というのは、『*β*』の「*πολυφύλιος*の言う『*ὑπάρχει πέπειν*』に相当するものであろう。『*β*』の「*πολυφύλιος*はこの観点を取り入れて、正確な定義といふものは可逆的なものである」と主張する。『カテゴリー論註解(第一)』にみられる例をもつて言えば、『*homo est animal rationale mortale*』という定義は、『*animal rationale mortale est homo*』としても真なので、『*homo est animal rationale mortale est homo*』ということになる。それに対して、『*homo est substantia animata sensibilis*』という場合には、『*substantia animata sensibilis est homo*』とは必ずしもいえないので、『*homo est substantia animata sensibilis est homo*』である。この観点は、『命題論註解第二』にも用いられているもので、例えば、『*Socrates est philosophus calvus senex*』というのがソクラテスの定義を示すものではないといふことが、この可逆性という観点から説明されている。¹⁴他方、『哲学の慰め』第五巻第四章の第十八節から第二十四節には、『定義というものは第一義的には種としての人間に述べ帰せられるものなのであって個体としての人間にはない、人間の定義が個体として人間に述べ帰せられるのはあくまでもそれが種としての人間である限りにおいてのことなのだ』といふことが、『フィロソフィア』によつて示唆されていると考えられる。以上の二点は、『哲学の慰め』第一巻第六章の『*γ*』の問答でも無視されてはいないかもしれないのである。

『*γ*』の第六の問い『*quid homo sit*』は、『おまえが人間である』ことを認めさせた第五の問答をふまえているために、二様に解

することが出来る。ひとつは、人間の定義を問うものだとする解釈。もうひとつは、問われているものをあくまでも「おまえ」のほうだと考えて、「おまえが人間であるという場合、その人間であるというのは結局のところどういふことなのか」という意味だとする解釈である。それに応じて、その次のフィロソフィアの問い返し *Nihilne aliud te esse nouisti?* の意味も二様に解せることになる。ひとつには、病人の提出した *「rationale animal atque mortale」* という定義が定義として不完全であるから別のもっと適確な定義を知らないのかという意味に解せる。他方、「おまえが人間である」ということのさらなる意味は、人間の定義では言い尽くせるものではない、さらにもっと深い意味あいを知らないのか、という意味とも解せることになるのである。

「rationale animal atque mortale」 という定義そのものは、『哲学の慰め』を書いたボエティウスの論理学書註解の仕事を通じて得られた最終的な定義であるといえよう。『エイサゴゲー註解第一』で、ボエティウスは、人間の定義として *animal rationale, mortale risus et disciplinae perceptibile* というものを受け入れ、この定義をもって可逆的な定義とみなしている。¹⁸⁾ だが、『エイサゴゲー註解第二』になると、*animal rationale, mortale* が人間の十分な定義であるといふことを自らの立場として述べる。¹⁹⁾ そして『カテゴリー論註解(第一)』では、それと同じ *animal rationale mortale* を可逆的な定義とする。さら

に含まれる *mentis et disciplinae perceptibile* は必ずしも要るわけではないといふことが付言されている。²⁰⁾ こうしたことからみるならば、『哲学の慰め』第一巻第六章で提出された定義は完全なものとも考えられるだろう。しかし、第五巻第四章に至って、*ratio* のなす認識の例として *homo est animal bipes rationale* という、第一巻第六章とは異なる定義が示されていることからみるならば、必ずしもそうとは言いきれないかもしれない。他方また、先の可逆性という観点、および定義というものは第一義的には個体としての人間に述べ帰せられるものではないという見方からすれば、病人の答え方 *esse me... rationale animal atque mortale* というのは、「人間」(*hominem*)とでなく「私」(*me*)と人間の定義を *esse* で結んでいるわけだから、どちらの見地からみても正しくないことになるだろう。しかしながらフィロソフィアは、病人のそのような意味での誤りのみを正そうとして問い返しているとは考えられない。なぜなら、もしそうだとすれば、少なくともフィロソフィアは、*Nihilne aliud te esse nouisti?* とは問い返さなかったはずだからである。

すると、以上からみて、少なくとも、この第一巻第六章の前半の *フィロソフィア* が問うているのは一貫して「おまえ」のほうであるといふことはいえるであろう。そして、この第六の問いに対する病人の不十分な答えに対してフィロソフィアはどのような修正を求めているのか、それは、結局のところ二様に解せてよいのではないだろうか。すなわち、ひとつには定義

としての修正を施すことも可能であろうし、他方また定義としての人間把握とは全く別の自己認識もありうるということになるわけである。

第五巻第四章において、フィロソフィアは、存在者の階層に応じた認識様式の段階づけを説く。上から *intellegentia*, *ratio*, *imaginatio*, *sensus* という四段階である。このうち人間に対応させられた *ratio* によって人間をとらえるとき、それは *homo est animal bipes rationale* となるという。しかし他方、同巻第五章第九節では、われわれ人間は、「できることならば」という限定は付けられるが、神的認識である *intellegentia* に昇りたいたいのだとフィロソフィアは告げるのである。この二様性は、先に指摘した²²に現れていた二つの姿勢に対応するものかもしれない。つまり、あくまで説明と理解を求めようとするとする姿勢と、「活力の極みにも至る精神の火」によって理解を抑制ないし制限しようとする姿勢とである。そして、自己を人間の定義では言い尽くせないものとして認識しようとするとは、先に言及した一種の想起によって神的認識を得ようとすることだと考えられるだろう。もともと、地上の肉体に繋がれた段階にある人間にとってそのようなことが可能なかどうかは、はっきりとは何も言われてはいない。他方、定義としての修正を施すにはどうすべきだということになるのか。注意されてよいと思われるのは、ポエティウスが *animal rationale mortale* を人間の定義として十分なものとみなすに至るのには、種成的差異 (*εἰδοποιότης διαφορῶν*: specificae differentiae) の考え

方などいわずに論理的な要請が強くはたらいっているということである。論理的な要請が優越しているにもかかわらず、例えば、『エイサゴーゲー註解』について明らかのように、こうした定義は世界観と密接に結びつけられているのである。しかし、もし、神による世界支配の確信、そして魂の降下・昇昇の図式を念頭に置いた始源としての神の確信、これらを優先させて、これらをもとにして人間の定義を考えるならば、その場合、少なくとも *mortale* は定義から取り除かれなければならないのかも知れない。そしてその代わりに、定義としての完全性を保つために *bipes* が加えられることになるのかも知れないのである。²³

註

- (1) テキストに A. Fortescue and G. D. Smith, *A. M. S. Boethius: De consolazione philosophice libri quinque*, London, 1925; Hildesheim, 1976. を用い、節分けも同版による。
- (2) E. K. Rand, *On the composition of Boethius' Consolatio Philosophiae*, *Harvard Studies in Classical Philology* 15 (1904), 1-28, esp. pp. 5-24; *Founders of the Middle Ages*, Cambridge Mass., 1928, pp. 163ff.
- (3) 他に例えは *'terrena animalia'* (2. 6. 4; 3. 3. 1), *'mortales'* (2. 4. 15), *'alumni'* (1. 3. 3; 3. 9. 21; 3. 11. 24) などと呼ばれる。この人間については、第一巻の『哲学の慰め』の作者ポエティウスと同一の境遇が語られていると考えられ

る。ところが、フィロソフィアによつてエネテュウスの名をもつて語りかけられることは決してない。

- (4) P. Courcelle, *Les lettres grecques en Occident*, Paris, 1948², p. 280.

- (5) H. Tränkle, *Ist die Philosophiae Consolatio des Boethius zum vorgesehenen Abschluss gelangt? *Vigiliae Christianae* 31 (1977), 148-56; M. Baltes, *Gott, Welt, Mensch in der Consolatio Philosophiae des Boethius, *Vigiliae Christianae* 34 (1980), 313-40.**

- (6) cf. P. de Labriolle, *Histoire de la littérature latine chrétienne, revue et augmentée par G. Bardy*, Paris, 1947, II, p. 784; E. Gegenschatz und O. Gigon, *Boethius: *Trost der Philosophie**, Zurich: Stuttgart, 1969, SS. LXI f. 305.

- (7) 以上が合せて第三の問と同一括されるのは、第三卷第十一章第九節から第二十五節までで、その中で、自然的衝動ないし志向(naturalis intentio)の向かうところと万物の目的ないし究極(terram omnium finis)とが、善(bonum)と同一であることを示されてゐる(cf. E. Gegenschatz und O. Gigon, *op. cit.*, S. 294)。ただし、(7)で'intentio'の語が用ゐられてゐることは説明を要するであらう。グルーバー(J. Gruber, *Kommentar zu Boethius *De Consolatione Philosophiae**, Berlin, 1978, S. 155)の「*ἐπιθυμία* *φύσικῆ ὀρέη*」(cf. Arist. *M. M.* A34, 1198a8)と相當するものとして理解されるのか。もし「ギロン」(op.

- cit.*, SS. 293f.)の指摘するように、第三卷第十一章の第九節以下がキケロの『最高善と最大悪について』と『神々の本性について』に触発されたところがあるとすれば、なほのことはあらう。キケロは「*ὀρέη*」に相當するラテン語としての'appetitus'をあげてゐるからである(*De Fin.* 3, 7, 23; *De Nat. Deor.* 2, 22, 58)。

- (8) cf. *Isag. ed. sec.* 1, 1, p. 137, 15-16 Brandt (SSEL48).

- (9) 'uallum'は、'arx'に紐をなすものとして用ゐられてゐる(1, 3, 8-10, cf. 1, 5, 4, 2, m. 4, 10; 4, m. 3, 17; 4, 6, 5)。A. Meillet et A. Ernout, *Dictionnaire étymologique de la langue latine*, s. v. arx に於ては、'arx'は「ギリシア語の'ἀρχή'に相當する語である。やうして、(7)『哲學の慰め』の'arx'は「プラトンの『テイマイオス』に言われた'ἀρχή' (70a6)に何らかの意味で対応するものとも考えられる」といふ(cf. *Resp.* 560b7 sq.)。

- 『テイマイオス』には $\alpha\rho\chi\eta$ に「 $\eta\mu\omega\nu \epsilon\pi' \alpha\rho\chi\eta\tau\eta\varsigma \sigma\omega\mu\alpha\tau\epsilon\iota$ 」(90a4)とさう表現がみられるが、これは「ロティノスによつて魂の一部が知性界にとどまつてゐることを示すもの」として言及される表現である(*Em.* 5, 1, 10)。

- (10) 例へば、第五卷第三詩第二十九行に言われる'consultat'は、アウグスティヌスの言で'consulere'に類似した意味をもたれてゐるやうに思われる(cf. *Aug. *De Mag.* 38-40; *Conf.* 11, 5, 7; *De Trin.* 12, 3, 3 etc.*)。

- (11) 例へば、人間の魂は、その全体が降下する(cf. *Procl. *El.**

Th. prop. 211) のか、それとちよの一部分が神のもとなり知性界なりにていふもの (Plot. *Em.* 3, 5, 3-4; 3, 8, 5; 4, 3, 9sqd.; 5, 1, 10) のかといふ論点は考慮されつゝることは言ふ難い。

(12) 論理学的著作の著作年代については L. M. de Rijk, *On the chronology of Boethius' works on logic*, *Vivarium* 2 (1964), 1-49, 125-62, を参照せよ。

(13) *Isag. ed. pr.* 1, 20, pp. 60, 25-63, 16 Brandt (CSEL 48); *Cat. (? ed. pr.) p.* 165 A Migne (PL 64).

(14) cf. Porph. *Isag.* p. 7, 4 Busse (CAG 4, 1).

(15) *Int. ed. sec. 2. 5. p.* 104, 7-13 Meiser.

(16) cf. E. Stump, *Boethius's De Topicis Differentiis*, Ithaca, New York, 1978, pp. 249-50.

(17) cf. Mar. Vic. (ps.-Boeth), *De Diff.* p. 891 C-D, pp. 907 D-908 A Migne (PL 64).

(18) *Isag. ed. pr.* 1, 20, pp. 60, 4-63, 16, なる、同書六十三頁の第五行から第六行だけは、写本上 *trinus et disciplinae perceptive* を欠いており、CSEL 版ではそれが補われている。校訂者ブランドの註によれば、この箇所についてはすでにエンゲルブレヒトとビルガルトが論じている。

(19) *Isag. ed. sec. 3, 4, p.* 211, 9-13.

(20) *Cat. (? ed. pr.) p.* 165 A.

(21) *Int. ed. sec. 2. 5. pp.* 108, 30-109, 8.

(22) cf. Porph. *Isag.* p. 10, 18-21; Boeth. *Isag. ed. pr.* 2, 3, pp.

91 sq., *ed. sec. 4, 8, pp.* 260 sqq.

(23) 第五巻第四章第二十三節には、*definitiv* と読むか *definit* と読むかという問題がある。もし *definitiv* と読むべきだとすれば、いづつで「定義した」のが問題となる。もし『哲学の慰め』のみを考慮するとすれば、人間を定義しているのはここ以外には第一巻第六章のみであるから、そこを指すことになるだろう。その場合は、二つの定義は厳密に区別されてはいることになるかもしれない。

(いしよ・まゆみ 筑波大学大学院哲学・思想研究科在学中)